

白紙に戻す、時間表を燃やしてしまう、歴史を消す、ただ、ひたすら無意識の世界へと下降してゆく、自由とは、ただ無意識の中にしか存しない王国なのかもしれない。海を排し、河を認めず、空中に漂う露のみを欲すれど、その否定の中にあっても海は現実といおうか、確かに存在しているという、ほかに言いようがないのである。なんたることか、このムイなる作戦は自己逃亡の一種なのか。その一種に似て非なるものとして敗戦国の隆盛がある。歴史上強大であった国々が、亡び弱少国がヨミガエってくる。すでに後進国と呼ばれ、先進国から奴隷狩りされた国々の出産率によって貧乏に打ちのめされながらも、明日という生き延びる要因としては、すでに搾取され侵略されてきた弱者の方に、すでに逆転の未来は証明されている。にもかかわらず、無駄な抵抗をしているといわざるを得ない。美もまたそうなのか。亡びゆく国々のむなしい輝きに似ていはいはしないか。それにしても、またしても人生は、再び繰り返しをつづけるであろうか、例えば永遠の回帰を!!それにしても、ふたたびそれにしても聖人、教祖といわれる世界の三大宗教の祖は、何故、男でなければならないのか。教典においては確たることを述べているにもかかわらず、自らが男性であること理由は一片たりとも述べてはいられない。すべてに見通しの筈の偉大な哲人、教祖が全絶、己れか男性であること理由に到らない。女性はそれに到りたいと願っているにもかかわらず、その原因を述べていないのは、やはり男性であって、人間とはなっていなかったと、という簡単な理由に帰すのであろうか。誠に不思議な現象ではある。私は母を尊敬している。例えマザーコンプレックスと呼ばれようと、私は母を尊敬している。男より何倍も母は、女性は偉大と私は考え、確信している。私にもし、芸術というものがあれば、それは女性への敬であり、尊であり、母への生物の生みの母なる海へのあこがれである。その支流の小さな流れ、九州の筑後川で育ったことを、その幼児体験のみが私をとらえて離さない。いつも放浪と呼ばれる旅から戻るところは筑後川であり、尊敬する母なるフトコロである。おさないといえ、これほどオサナイことはないだろう。いま 59 歳いまやオサナさも、すべてが忘れ去られようとし、すべては消え去ってしまった。それも一つの風景として誠に立派な理由であるに違いない。しかし、理由のために生きることは辛い。